

堀 芳 孝 先 生

八 田 七郎右ヱ門

「福井中学の先生」として汽車通学の時に遠くから拝していた堀先生に親しくご指導をいただくようになったのは、就職３年目の昭和１７年頃からだと思います。当時は博物同好会として実施されていた植物採集会地学教室の案内をどうして入手したのか、今ははっきり覚えていませんが、とにかく山野を歩かれるのだからと、山のひとり歩きをしていた私が興味を感じたのは確かです。先ず様子うかがいに参加したのが大野郡方面だったと思います。しかし、リュックの中は弁当と水筒だけでした。

「植物を採ろうとは思わないが、山歩きの会なのでご一しよさせて頂きたい」「まあよかろう」ということでお伴をしたわけですが、３回ぐらいに「君もボチボチ採たらどうかね」「はい、この次から採ります」ということで、大げさに言えば、これが病みつきになったということでしょう。

元来が物好きな私のことですから、やり出したらとことんまで（結果としては極めて浅いものに終わりましたが）と一人歩きの採集も始めたのは、採り出した翌年ぐらいからでした。路傍足下のものから樹木に至るまでのすべてが初対面ですから、１回の採集会で始めのうちは１００種をこえました。一々の名前を聞いては紙テープをくくりつけて胴乱に収めるわけですが、この収め方についても指導を頂いたようです。帰ってからの整理が大変で、交通機関利用の時代ですから暗くなってからの帰着が殆んどで、新聞紙に挟み終わるのは大抵夜中の１～２時だったと覚えています。帰ってからの処理については先生は何もおっしゃらなかったけれども、評価を頂かなくてという気も手伝ってとにかく精出したようです。そのうちに現地で挟むことを覚え、手作りの５％ペニヤの野冊に仕込んで帰着と同時に圧搾機にかけないようにしました。この機は古い回転椅子の利用で相当な圧力をかけることができました。幸いに午前の吸湿抵交換は家内がしてくれましたし、１日２回の交換と圧力で、変色もシワもなく、先生から、でき上がった腊葉についてはお賞めを頂きました。

「人よりも先に、多く採れ。そしてその前に周囲の状況をよく見、採ろうとする標本の全体の姿を目に入れておくこと。」この言葉は今も耳に残っています。標本がなければ研究対象物が無いこと、それらが生育する環境や個体の大づかみな特色を見極めておけということで、このことは今でも広い範囲で役立っている点の多いことを喜んでいます。春秋の農繁期にも殆んど参加したものですから、だんだんご指導も厳しくなって、分野をしぼった調査などのご指摘もありましたが、基礎知識も能力もない私ですから、相変わらず標本づくりのみを続けていました。回を重ねるたびに初対面の植物も少なくなり、場所によっては３０種というような日もありました。こうなると不思議なもので、一度お聞きしただけでビニール袋に入れ休憩時に紙に挟む時スラスラと名前が出てくるのも慣れかなと思いました。先生も八田は何处で何を採っているか覚えてい

てくださって、「これ、まだ採ってないだろう」などと教えて頂けるようになりました。中には図鑑学習のものもあったりして、「これは初めてのはずだがな」「図鑑で見たのとピッタリです」というようなこともありました。先生とは家が近くなものですから、名前のわからない標本は何回か訪問もさせて頂きました。9月にお訪ねした時のことです。「先生の庭のフランスギクは、秋にも咲くのですね」と申し上げたところ「いや、あれはシャスターデージーという秋に咲く別の外来種だよ」と教わり、一見似ているからと開花時期の特性を弁えない浅さを反省しました。たった一言で他にご説明も頂きませんでしたでしたが、深い教訓を頂いたと思っています。このことは、大野郡で採ったからすべてがその特性とは限らず、海岸地方でも採れる可能性は充分あるということで、やはり種固有の性質を知らなければいけないということでもあります。恥ずかしながら私は大野で採ったものが河野にもあると珍しかったのです。何か勝手にそういう決めつけをしていたのだろーと思います。

武生市平吹町の日野社神境内でみつけた珍しいものをお見せした時の「これは、県下第三番目発見のコハナヤスリだよ」といわれ、日野山頂や鯖江市水落町の慰霊塔芝生にもありましたと報告や、日野山北面中腹の水辺でのチョウジギクに「そんなものがありましたか」。同じく松尾谷町山ろくの杉林でのシモバシラに「県下初認ですよ」等、先生に喜んで頂きたい気持ちが多分にあったのかも知れません。分布範囲を確かめるに役立ったとすれば望外の喜びです。

光陽中学校までお尋ねしたこと、博物館内で膨大な量の標本を精力的に進められたこと、健脚で採集会を引っぱって歩かれたことなど、一つ一つの会場にそれぞれの思い出が残っています。板東島で「むべなるかな」のムベだよと合点したり、経ヶ岳では落石があったが胴乱に当たって難を免れた三田先生のことなど20年近くも前のことが今も鮮かです。

先生も一時お体をそこなわれて採集会が中断されました。その時は、先生を失って福井県の植物は誰が教えてくれるのだろー等と危ぐ致しました。今、大変失礼なことを思ったものだと反省しています。先生の遺志を継いでくださった方々のご指導を十分に受けられる喜びを味っているからです。

大へん大事な方を失いましたが、紙上特集で名物先生を偲んでくれたこと「ムベなるかな」と感じ、福井県の自然の学者を送り出すのが私の務めであり、先生にお報いする途だと信じています。

(福井県愛鳥教育研究会長)